

49 「言葉と文字」

言葉と文化に関することに興味がある。そんなものにあまり関心はないという人が多いと思うけれど、まあ少しでも興味を持ってもらえれば嬉しい。

どこで見たのか忘れたが、近代化に遅れるという理由でアラビア文字だったトルコ語を、ラテン文字に変えたケマル・アタテュルクの改革のことを読んだことがある。

アラビア文字は唐草模様のような文字で右から左に書かれ、見るからに読み書きが難しそう。実際にも学ぶのは難しいらしい。

トルコはイスラム教国には珍しく、アタテュルクの近代化政策によって政教分離され信教の自由が認められている。イスラム教国とはいえ比較的戒律はゆるい。

アラビア文字でなく我々にも読める文字を使っているだけでも、開かれた国という感じがする。

新鮮に感じたのは、言葉と文字は別物ということだ。そんなことは当然なのだが、今まで深く考えたこともなかった。ラテン文字（アルファベット・ローマ字）は、多くの欧米諸国で使われているから、言葉は違っても文字が同じというのは普通のことだ。そして、言葉が違っても同じ文字なら読むことができるから、他国語を学ぶ上での障壁は少ない。

ただし、独特の発音がある場合などは特殊な文字をあてている。例えば、ドイツ語のウムラウト「ö」「ü」、フランス語のセディーユ「ç」「ş」、スペイン語・ポルトガル語のティルデ「ñ」「ã」「õ」などだ。トルコ語についてもイとウの間間的な発音があり、それを大文字の「I」を短くしたような「ı」とした。こうすることで「ı」と「i」の発音を区別することができるが、大文字では「i」は「I」となるから、「ı」と区別がつかなくなってしまう。そこで、苦肉の策として大文字の場合でも、「i」→「İ」のようにIの上に点をつけることにしたのである。

「トプカピ」というアメリカ映画があるが、“ピ”という発音は誤りで「トプカプ」が正しい。

「TOPKAPI」と書くから間違うので、すべて大文字なら「TOPKAPİ」小文字なら「topkapı」と書かなければならない。現地の発音で「ı」はイよりウに近いようだ。

外国語で、ちょっと変わった文字だなと思ったら、正しい発音を知って正確に発音したいものだ。

現在世界で話されている言語の数は数千といわれるが、使われている文字の種類は数百しかない。

日本人である私は、日本語を話し、長い年月を経て作られてきた独自の日本文字（漢字+ひらがな+カタカナ）を書く。中国から表意文字である漢字を借用し、漢字の一部を使って独自に創った表音文字の仮名文字（ひらがな、カタカナ）を組み合わせて使っている。

表意文字と表音文字を混合して使用するのは日本（と韓国）だけである。（最近韓国は漢字の使用を控え、表音文字のハングルを主に使うようになっている）

日本語について、文字が変わるなどということは全く考えられないが、世界では言葉と文字で深刻な問題が起きている。以下は、ある言語学者が「日本語について」というテーマで、モンゴル語とその文字についてふれたものである。

『大納言というのは、大宝令制でできた官職で、大臣のつぎの職である。大臣が参内しないときは、それに代理して諸政をみた。比較はできないが、比喩としていえばいまの事務次官にあたるであろう。

1、200年前の日本の官人、知識層はすでに漢字がよめたからこれをダイナゴンとよんだ。

むろんこの官名には和称もある。「オホイモノマヲスツカサ」といった。何某がそれに就任した。人がお祝いにゆく。「オホイモノマヲスツカサに御昇任なされておめでとうございます」といわねばならない。息が切れ、途中で息をいれていったであろう。

日本語と蒙古語は、おなじウラル・アルタイ語族に属し、膠着語という種類の言葉である。膠（ニカワ）でくっつける。膠はテニヲハのことだ。私は若いころ蒙古語を学んだが蒙古語では鉛筆のことを直訳してナマリノフデ（ホルゴルジン・ビール）という。ながったらしいことばで、喋っているうちにくたびれてしまう。日本では漢語をもって固有の日本語を鍛練してきたので、このあたらしい文物が入ってきたとき、「石筆」といった。意味もわかり、発音も簡潔である。ついで鉛筆ということばにかわった。黒鉛を使っている以上、石という漠然とした文字をつかうより、より正確に本質をあらわしているであろう。

さて、蒙古人のことだが、中国にちかい地方の蒙古人に鉛筆のことをホルゴルジン・ビールといってもわかりにくい。それよりチェン・ピイ（鉛筆）と中国語でいえば、ああエンピツかと思って通じる。

ソ連に近い地方では、カランダーシュとロシア語でいわなければこれは通じない。となると蒙古語のホルゴルジン・ビールというのは蒙古のどこに行っても通じない言葉であり、それは要するにオホイモノマヲスツカサのたぐいと同様、外来の事物や概念をわざわざ国語訳したもので、いささかも現実には使われない言葉なのである。日本で例えば文房具屋に「ナマリノフデを下さい」といっても通じないのと同じである。蒙古語と日本語は同祖とっていい言葉だが、ただ日本語は千数百年前に漢語をふんだんにとり入れることによって形而上的な概念を表現できる言語に仕立てあげた。以来、われわれの先祖はこの言語によって高い文化をつくりだすことができた。

蒙古語はそういう鍛練を経ぬまま近代に至った。哲学、微分積分ということばすら、蒙古語では表現できない。しいて表現しようとするればホルゴルジン・ビールとかオホイモノマヲスツカサのたぐいになり、もはや言語たる機能までうしなってしまう。とって蒙古語は日本語のような千年以上の抽象概念表現の鍛練を経ないため、最近の蒙古人はやむなく、ロシア語を大量に輸入した。政治的に、一時に、である。ロシア語を導入するためには在来の蒙古文字を捨てた。蒙古文字は元朝のころ、シリア文字を原型として成立したもので、母音文字、子音文字をたくみに変化させたうつくしい文字である。

しかしそれを使っているかぎりにはロシア語の単語を大量に導入するわけにはいかないから、この文字をすて、ロシア文字を採用したのである。でなければ文明社会に参加できないまでに言語が遅れていた。蒙古語の悲劇というべきであろう。

この悩みは、マレー語など南方語にも同様のことがいえる。かれらは、哲学、数学、物理学といった教科書や学术论文を母国語で表現できず、英語、フランス語といったものを使っている。

何度もいうが、千数百年の鍛練を経た日本語は、そういうものを十分できるし、表現しつつあり、今後も表現してゆくだろう。私は実は漢字制限についての極端な論者たちが、われわれの日本語を蒙古語やマレー語の段階までひきもどしはしまいか、と心配しているのである。そうなればおそるべき荒廃が来る。えらいことになります。』

モンゴル語は本来ウイグル文字（起源はアラム文字[シリア文字]）から派生した「モンゴル文字」を使用していたが、社会の進歩についていけず国家の決断により「キリル文字（ロシア文字）」へと移行した。言葉も文字も、それを使う人々が時代の進歩に合わせてしなやかに変えていかなければ使い物に

ならなくなってしまうという一つの例だろう。

時代の進歩と言葉の関係について感じていたことを少し書いてみたい。

今年の2月タイとマレーシアに旅した。マレーシアのマラッカに滞在した時のことである。

ホテル入り口にあるビデオシアターで、このホテルを所有するディベロッパーのプロモーション・ビデオを見た。急な雨で足止めされてしまったためだ。放映されていたのは、店舗付リゾート・マンションの宣伝ビデオだった。

プロモーションの責任者は、中国系の若い実業家といった雰囲気の人で、計画コンセプトなどを流暢な英語で説明する。販売責任者はマレー系の女性、設計責任者はマレー系の若い女性建築家、といったような人々が次々と流暢な英語で説明している。

世界中の発展途上国、自国に十分な技術力がなく欧米諸国から新しい技術を導入している国々は、高等教育は当然英語で学ばなければならない。そのため必然的に英語は話せるようになる。その結果、多くのことが実質的に欧米の強い影響を受けることになってしまうのだが。

その点、日本は近代化に遅れはしたが何とか追いつくことができた。そのための歪も勿論多かったが、少なくとも自国の言葉を変えたり（植民地化）、文字を変えたりすることもなくここまで来れたことは幸いだった。

英語が世界語となり、英語を自由に話す発展途上国の人々は、日本人に対し少し優越感を持つかもしれない。尤も、日本人が英語を話せないのは英語教育の問題もある。

マレーシアでも現地の人たちとの会話は英語である。本当は、我々がマレーシアの言葉を少しでも覚えて、マレー語でコミュニケーションをはかるべきなのに、なぜか英語なのである。よく考えると、このような不思議な事態に疑問を持っている人は多くない。

最近私は英語の世界支配に反発を感じている。彼らの言葉で自分が不便を感じるのは、できればもう止めたい。多くの日本人にとって英語は自由に話せない言葉であり、世界中どこに行っても自国語で済めば、こんな楽なことはないのと思う。英語を話す人々にはとっては、世界中どこに行っても自分の言葉でやれるのである。特にビジネス、中でも法律やテクノロジーの面では、自分の言葉でやればこれほど有利なことはない。世界共通言語は、あつたほうが勿論便利だとは思いますが、特定の国の言語でないほうが公平ではないのか？（2013年7月21日）